



## 2

## 特別寄稿：「臨床消化器内科」40 年を振り返る 本誌編集を通じた出会いと学び

一瀬 雅夫<sup>\*,\*\*</sup>

### I 創刊号との出会い

「臨床消化器内科」との出会いは創刊号，純白にスカイブルーが印象的な洒落た装丁の雑誌を書店で見つけ，それが研究室の先輩 丹羽寛文先生の編集された雑誌であることを知ったときの驚きは今も忘れない．当時，消化管を主題にした先行雑誌が専門医の高い評価を得ていたが，病理形態学主体の重厚な内容で，折しも内分泌学領域の進歩を受けた消化管ホルモン～細胞内シグナル伝達機構への理解の深化，そして，ヒトゲノム内のがん遺伝子発見をきっかけに分子生物学の興隆による新たなメディカルサイエンスの展開を感じ取っていた若い世代としては，物足りなさを感じるところであった．胃潰瘍の診断を特集した創刊号は防衛医科大学校教授として栄転され，精力的に活躍を開始された丹羽先生のその後の発展を予感させる輝きを放っていた．即，購入し，夢中になって読んだことを思い出す．日本消化器内視鏡学会の当時の理事長 崎田隆夫先生の巻頭言に始まる内容については申すまでもなく，執筆者の陣容に丹羽先生一流の戦略が感じられ，未だ若かった私

にも強烈な印象を残した．

丹羽先生のご活躍の一端を垣間見られると的好奇心から毎号購入していたが，充実した内容の記事が多く，本誌の毎月の発刊を心待ちにしていたことを思い出す．広く消化器内科領域を俯瞰し，臨床の一步先を進む先端科学の知見にも着目した視点で記事が構成されていたのは，創刊時の編集委員で，膵内分泌・肝疾患領域の研究に通じた岡 博先生，消化吸收を含め消化管領域に広く目配りができる丹羽先生の最良のパートナーであった中村孝司先生が存在が大きかったものと勝手に想像している．そもそも，丹羽先生は臨床関連の教育活動にきわめて熱心で，すでに多くの著書を出版されていた．執筆に当たっては，読者の視点・要望を何より重視しておられ，そして共著の場合は，人選を格別慎重にされていたと思う．そのため，本誌の編集では，日常診療上の重要なパートナーとして信頼する外科の先生方（島津先生，その後，玉熊先生）も含め，気心の知れた実力派のメンバーを擁し，充実した時を楽しんでおられると感じていたが，今日改めて，当時の編集委員の先生方の陣容を振り返っても，その思いは変わらない．

\*埼玉医科大学消化器内科・肝臓内科  
(〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38)

\*\*日鉄テックスエンジニアリング株式会社

## II 編集委員就任時を振り返る

### 1 背景と心境

本誌創刊から20年余の時間が流れたある日、丹羽先生より編集委員に加わるようにとのご指示があった。大変光栄に思ったが、求められる仕事のスタンダードの高さを思うと、一瞬ひるむ気持ちが起こりかけた。結局のところ、お断りすることなどできるはずもなく、大役をお引き受けした。当時、私は和歌山県立医科大学で勤務していた。名称は県立医科大学であったが、明治維新の際、賊軍であった紀州和歌山、同じく朝敵の会津福島と共に国立大学医学部は設置されず、県が自前で県立医大を設立した経緯であり、実質、県立医大は1次～3次の救急をすべて引き受ける県立病院の立ち位置にもあった。しかも、着任時、医局員は10名という状態で、冗談かと思うほど忙しかった(戊辰の役の影響が今も残っているという事例だが、和歌山県人の優秀さは逆境を臨床力を養う得難い環境に変えていた)。もっとも、編集委員を拝命した時期は着任後数年を経過し、医局員も増え、医局が安定してきた時期であった。丹羽先生がその辺も十分ご理解のうえ、お声を掛けてくださったことを、後で知ったが、当時は、先生のお考えを察するゆとりがなく、緊張の塊と化して編集委員会に出かけたことを思い出す。

### 2 緊張感のなかで

参加させていただいた編集委員会は時を経て、陣容が大きく変化していたが、メンバーの先生方がいずれも消化器領域における高い見識のexpertであることに変わりはなく、雑誌の編集はきわめて安定した状態にあり、秀逸な特集テーマ、優れた内容の記事の収載により、多くの読者の支持を得て発刊は順調に進んでいた。新参の私は丹羽先生をはじめ、前任の編集委員

の先生方が発する緊張感溢れる雰囲気の委員会で大いに勉強させていただいた。

もっとも、スタートは順調とはいえなかった。足枷になったのは交通機関、和歌山から東京までは、関西空港からの空路が圧倒的に便利であったが、当時は昼の便が少なく、編集委員会開始ギリギリとなる便しかなかった。そこで陸路大阪経由JRを選択したのがつまずきの元。問題は大阪までの特急列車、自然溢れる紀勢本線を走って和歌山に到着するが、雨風に弱く、よく遅延する。また、鹿や猪と衝突ということもまれではない。編集委員会に出るようになって間もないある日、紀伊半島の山の神様が鹿に命じて私に試練を下された。結局1時間を超える遅刻となり、委員会終了後、危険なオーラを発散する丹羽先生に呼ばれ、理由を問われた。私のシドロモドロの釈明を聞いているうち、先生は噴き出されてしまい、“もう少しましな嘘をつけ”と言われて、笑い出されたので、お付き合いで笑っていたら、反省していないと判断されてしまい、猛省を促された。このときの誤解は、後日、神々が統べる、鹿や猪が集う紀伊半島の大自然を間近に見ていただくまで続いた。

## III 制作の舞台裏

### 1 企画への想い

編集委員会に参加させていただくようになって理解できたことは、増永代表の存在。本誌担当社員が委員会の議事進行を担当し、各委員の意見を集約する形で委員会は開催されていた。社員の方々の能力は高く、とくに司会進行役の方は消化器領域の現況をよく理解され、勉強されていたので、各委員の先生方とのやり取りもかなり専門的に踏み込んだものであり、各号の特集がより充実したものになるよう、巧みに委員会を運営されていた。そのような形で毎号の

企画が順調に立案されていく様子を穏やかな笑みを浮かべた増永代表が見届けておられた。最初の頃は単なるオブザーバーくらいに考えていたのだが、回を重ねるごとに、代表が要所では、かなり力強い発言をされることに気がついた。とくに、特集のテーマが編集委員の学術的興味に偏りすぎた場合などで躊躇せず発言され、消化器診療の第一線に従事する読者の視点・興味に沿った軌道修正や代替案を提示された。また、各号の構成記事について内容に過不足があると考えられた場合は、丁寧だがストレートな発言をされた。医学・診療の最新の進歩を受けて過去に取り上げたテーマを再度取り上げる際には、過去の特集や関連の書籍を参考として提示されたり、指針・ガイドラインなどの公表予定を見据えながら、タイムリーな発刊時期を編集委員と共に真剣に検討されていた。また、消化器診療の第一線の情報収集を自ら積極的に行われていた節があり、学会の重要なセッションの会場で社員と共に演題に耳を傾ける代表の姿をたびたびお見かけした。

## 2 編集方針にふれて

本誌の編集に当たっては、当然のことながら執筆者の人選がきわめて大事であるが、そのような局面では、しばしば、全国の専門家の得意分野・最近の消長に精通しておられた丹羽先生、そして、そのご薫陶を受けてこられた田尻先生が尋常ならぬ能力を発揮され、委員会の討議をしばしばリードされたが、増永代表も多くの専門家との太いネットワークを感じさせる、通常では知りえない情報を適宜提示されることで適切な人選へと誘導されていた。そのようなことが重なるたびに、さすがの鈍い私も本誌に傾ける代表の想いや情熱を強く感ぜざるをえなかった。そして、何より、丹羽先生が本誌を仲立ちに得難い盟友をもたれていたことも……。

創刊以来本誌に注がれ続けてきたお二人の共通の熱い想いを強力な原動力に、歴代の編集委員の先生方の高い見識とご尽力が推進力として加わり、本誌が消化器病診療に従事する多くの医師の支持を集めるところとなり、長寿雑誌になったことは至極当然と感じられる。

## Ⅳ 時代の変化とともに

創刊から40年を経て、消化器病学の分野も専門分化が進み、上部・下部消化管、肝、胆膵の各分野に分かれ、さらに消化器内視鏡機器の目覚ましい進歩により内視鏡診療という一つの新たな領域が姿を現し、外科領域の低侵襲医療の潮流と溶け合っている。このような時代背景のなか、本誌の編集委員も各分野の専門家が起用され、来るべき時代の読者のニーズに対応する体制が作られてきた。また、増永代表は雑誌のデジタル化や検索システムの整備など業界のなかでもかなり早い時期から将来を見据えた取り組みを進められていた。とくに、グローバル化が進むなか、「臨牀消化器内科」の読者を韓国・中国へと広げる構想も模索されていた。そのような状況であったから、7月下旬にいただいた、本誌第40巻をもって休刊とする決定をされ、最終号への寄稿を求める増永代表からのメールは、誠に晴天の霹靂であった。とくに一昨年、丹羽先生の信頼が篤かった藤城教授を中心に、教授を補佐する各領域の新進気鋭の編集協力者を加えて陣容のいつそうの強化充実が図られ、ますますの発展が期待されていたところでもあり、心から残念に思う次第である。しかし、人生の時間は限られている。増永代表のように自身の仕事に熱意と情熱、ビジョンをもって人生を駆け抜けてこられた方の選択、余人が口出しする余地はない。

とりとめのない思い出ではあるが、忘れえぬ

風景がある。時は平成、会議前の待ち時間、昭和復興期のレトロな風景を模した鉄道のレイアウトを前に増永代表と丹羽先生が実に楽しそうに談笑されていた。高度経済成長の波に乗りながらも、個人の感情は封印し、耐え、ひたすら働き、築いた昭和の時代、本誌の発刊などを通して共に戦ってきた時代を回顧しつつ語る盟友的な心の通い合いに触れ、また、多くの苦勞を乗り越え、友情を培い、良き思い出に変えてこられたお二人を心底羨ましく感じたことを思い出す。一方の丹羽先生はすでに去られ、残られた増永代表が守られてきた本誌もひとまず幕を閉じる。私のような者も謙虚に時の流れを受け入れざるを得ない人生のひと時である。

## おわりに

多くの読者を得て、40年の長きにわたり高い評価を得てきた「臨牀消化器内科」。今回の決定はつくづく惜しまれるが、振り返れば、発刊された膨大な特集記事が医療従事者にとって貴重

な資料となって残っていることに気づかされる。願わくは、これらを足掛かりに、続く世代が消化器診療における新たな遺産を生み出してくれることを心から期待するものである。

最後になったが、本誌の編集に参画させていただき、高い見識の先生方との作業を通じて多くを学び、貴重な経験を積ませていただいたこと、篤く御礼を申し上げたい。何より得難い豊かな時間を共有させていただき、人生の良き思い出を作らせていただいたこと、増永代表、そして、旗下の歴代担当社員の方々に心から感謝申し上げる次第である。

### Precious Experience and Learning in Having Served as an Editorial Board Member

Masao Ichinose\*

*\*Department of Gastroenterology and Hepatology, Faculty of Medicine, Saitama Medical University, 38 Morohongo, Moroyama-machi, Iruma-gun, Saitama 350-0495, Japan*

*\*\*NIPPON STEEL TEXENG. Co., Ltd*